

明治八年(一八七五年)四月太政官達第四十九號 惡疫流行ノ際貧困者處分規則

明治九年(一八七六年)二月内務省達乙第十二號 惡疫流行ノ際派出スル醫師ノ患者病狀等届出テニ關スル規定

明治九年(一八七六年)五月内務省甲第十六號 天然痘豫防規則

明治十年(一八七七年)八月内務省乙第七十九號 虎列刺豫防心得及消毒藥、消毒方法

明治十二年(一八七九年)六月太政官達第二十三號 虎列刺病假豫防規則

明治十三年(一八八〇年)七月 傳染病豫防規則

明治十三年(一八八〇年)七月傳染病豫防規則ニハ虎列刺、腸室扶私、赤痢、發疹室扶私、痘瘡、實布埜里

亞ノ六種ヲ定メタリ、本規則ハ現行傳染病豫防法發布迄存續シタルモノニシテ明治三十年(一八九七年)四月

法律第三十六號ヲ以テ現行ノ傳染病豫防法制定セララルト共ニ廢止セラレタリ。

現行傳染病豫防法制定ト共ニ新ニ「ペスト」及猩紅熱ヲ加ヘ八病トナシ其ノ後明治四十四年(一九一一年)四月

「バラチフス」ヲ大正七年(一九一八年)四月流行性腦脊髓膜炎ヲ追加セラレ、更ニ大正十一年(一九二二年)

年(月)一部ノ改正行ハレ病種ニ付テハ赤痢中ニ疫痢ヲ含マシメ其ノ他病原體保有者ニ關スル條項「ペスト」コ

レラ」疑似症ニ對スル條項業務禁止ノ條項、昆蟲等ノ驅除ニ關スル點等ヲ新ニ加ヘタリ。

二、法定傳染病ノ種類及其ノ豫防規定ノ概要

法令ニ定メラレタル傳染病ハ左ノ十種ナリ。

「コレラ」、赤痢(疫痢ヲ含ム)、腸「チフス」、「バラチフス」、痘瘡、發疹「チフス」、猩紅熱、「チフテリア」、流行性腦脊髄膜炎「ペスト」。

以上十種以外ニ豫防ヲ必要トスル傳染病ノ發生シタルトキハ内務大臣ニ於テ之ヲ指定ス。

「コレラ」及「ペスト」ノ疑似症ニ付テハ常ニ其ノ本症ト同一ノモノト見做シ之ヲ取扱ヒ其他ノ八種ノ傳染病ニ付テハ流行アリ又ハ流行ノ兆アルトキニ其ノ疑似症ニ對シテ地方長官ハ該豫防法ノ全部又ハ一部ヲ適用スルコトヲ得ヘシ。

傳染病ノ病原體保有者ニ對シテハ原則トシテ總テ之ヲ傳染病患者ト見做シテ同様ニ之ヲ取扱フコトナリ居ルモ、「コレラ」以外ノ傳染病ノ病原體保有者ニ付テハ特別ノ取扱方法ヲ定メ其ノ方法ヲ内務省令ノ施行規則中ニ規定セリ、醫師ニシテ前記ノ傳染病患者又ハ死體ヲ診斷檢案シタルトキハ十二時間内ニ官憲ニ届出ツル義務アリ、又一般民家ニ於テハ傳染病患者又ハ其ノ疑アル患者死者アリタルトキハ速ニ醫師ノ診斷ヲ受クルカ又ハ其ノ地ノ官憲ニ届出ツルノ義務アリ。

傳染病患者ノ發生シタル家其ノ他傳染病毒ニ汚染シ又ハ汚染シタル疑アル家ニ於テハ醫師又ハ當該吏員ノ指示ニ從ヒテ清潔方法及消毒方法ヲ行ハサルヘカラス。

傳染病患者發生シタル場合、當該吏員ニ於テ豫防上其ノ必要ヲ認メタルトキハ患者ヲ傳染病院隔離病舎ニ入ラシムルコトヲ得ヘク、又「コレラ」發疹「チフス」、「ペスト」ノ場合ニ限り一定ノ期間其ノ發生場所ノ交通

ヲ遮斷シ或ハ病毒感染ノ疑アル者ヲ一定期間適當ノ場所ニ隔離スルコトヲ得ヘシ。

傳染病患者及傳染病ノ病原體保有者ハ業態上病毒傳播ノ虞アル業務ニ従事スルコトヲ禁セラレ其ノ業態ノ種類ハ施行規則中ニ明記セリ、即チ赤痢腸チフス「バラチフス」等ニ對シテ飲食物關係ノ業務ニ直接従事スルコトヲ禁シ、猩紅熱「チフス」流行性腦脊髄膜炎等ニ對シテ宿屋劇場等多衆ノ客ニ接スル業務ニ直接従事スルコトヲ禁スルノ主旨ニ依リ規定セラル。

傳染病患者ノ死體ハ火葬ニ附ス極メテ特殊ノ場合ニ限り土葬スルコトヲ得ヘシ市町村ハ地方長官ノ指示スルトコロニ從ヒ其ノ市町村内ノ清潔方法及消毒方法ヲ施行シ醫師其ノ他必要ナル人員ヲ雇入レ及器具藥品等ヲ設備セサルヘカラス、又場合ニ依リ鼠族昆蟲等ノ驅除ヲ行フ義務アリ、其ノ他地方長官ノ指示アルトキハ傳染病院隔離病舎隔離所又ハ消毒所ヲ設置スルノ義務ヲ有ス。

傳染病流行ノ狀況ニ依リテハ地方長官ハ船舶汽車等ノ檢疫ヲ施行スルコトヲ得ヘク、其ノ他豫防上必要ト認ムルトキハ左ノ各項ニ付之ヲ施行スルノ權限アリ。

- 一、健康診斷又ハ死體檢案ヲ爲スコト
- 二、市街村落ノ全部又ハ一部ノ交通遮斷ヲ爲シ又ハ人民ヲ隔離スルコト
- 三、祭禮、供養、興行、集會等ヲ制限スルコト
- 四、古着、襤褸、古綿、其ノ他病毒傳播ノ虞アル物件ノ出入ノ制限停止又ハ廢棄其ノ他ノ處分ヲ爲スコト

- 五、病毒傳播ノ媒介トナルヘキ、飲食物ノ販賣、授受ヲ禁止シ又ハ其ノ廢棄其ノ他必要ナル處分ヲ爲スコト
- 六、汽車、船舶、工場等ニ醫師ノ雇入其ノ他必要ナル設備ヲ命スルコト
- 七、清潔方法消毒方法ノ施行ヲ命シ及井戸、下水、溝渠、厠圍等ノ新築改築又ハ廢止若ハ使用ノ停止ヲ爲スコト

八、一定ノ場所ノ漁撈遊泳ヲ禁シ又ハ水ノ使用ヲ制限若ハ停止スルコト

九、鼠族昆蟲等ノ驅除及之ニ關スル施設ヲ爲サシムルコト

傳染病豫防ニ關スル費用ハ市町村ニ於テ負擔スルモノト、道府縣ニ於テ負擔スルモノトハ法令上明確ニ區別シテ規定ス、國庫ハ道府縣ノ支出ニ對シ「ベスト」「コレラ」ニ對シテハ三分ノ一其ノ他ノ傳染病ニ對シテハ六分ノ一ヲ補助シ、又ハ道府縣ヨリハ市町村ノ支出ニ對シ同様ノ割合ニ於テ補助ヲ與フヘク規定セラル。

法令ニ據リテ行フ當該吏員ノ指示シタル事項ヲ履行セサル者、醫師ニシテ傳染病ノ患者死體ヲ診斷檢案シテ規定ノ時間内ニ届出ヲ爲ササル者又ハ虚偽ノ轉歸届ヲ爲シタル者等其ノ他清潔方法消毒方法ヲ施行スヘキ義務者之ヲ行ハス或ハ許可ナクシテ制限又ハ禁止シタル事項ヲ敢行シタル者等ハ同シク罰金ニ處セラル。

清潔方法消毒方法ヲ行フヘキ義務者之ヲ行ハサルトキハ私人ニ對シテハ市町村、市町村ニ對シテハ府縣等ニ於テ之ニ代ツテ執行シ其ノ費用ヲ追徴スルコトヲ得ヘシ。

海外諸港及朝鮮、臺灣等ヨリ來ル船舶ニ對スル檢疫ハ別ニ海港檢疫法明治三十年（一八九九年）二月法律第

十九號ヲ以テ之ヲ定ム。

清潔方法及消毒方法

清潔方法及消毒方法ハ内務省令傳染病豫防施行規則中ニ詳細ノ規定アリ、清潔方法ニ付テハ各病ニ付必要ナル施行ノ場所物件等ヲ指示シ、又別ニ一般ニ對シテ行フ場所ノ方法ヲ示シアリ、一般ニ對スル清潔方法ハ大體春秋二期ニ於テ全市町村內ノ全家屋ニ行フコトヲ府縣ノ命令ニ於テ規定セリ。

消毒方法ハ燒却、蒸汽消毒、煮沸消毒、藥物消毒ノ四種ヲ規定シ各其ノ實施方法ノ概要ヲ示ス、藥物消毒ニ付テハ石炭酸水以下七種ノ藥劑及瓦斯消毒ニ付其ノ藥品ノ調製方法使用ノ量等ヲ規定ス、更ニ各病ノ場合消毒ヲ必要トスル場所物件等ニ適應スル消毒方法ノ應用モ其ノ大體ヲ規定ス。

三、傳染病豫防ノ機關ト施設

傳染病豫防ノ機關トシテハ中央ニ於テハ内務省衛生局ニ防疫課アリ、府縣ニ於テハ府縣廳ノ警察部ニ衛生課アリ其ノ管內ノ傳染病豫防事務ヲ統轄ス。

府縣ニ於ケル傳染病豫防事務ハ警察系統ニ屬シ豫防ノ事務ノ實行ニ衝ルハ主トシテ警察官ナリ、郡市町村ニ於テハ消毒及傳染病院、隔離病舎ノ管理並發生シタル患者ノ收容治療等ノ事務ヲ施行ス、傳染病豫防上必要ナル調査研究ニ關シテハ中央ニ傳染病研究所アリ、府縣廳衛生課ニハ各一ヶ處乃至數ヶ處ノ細菌検査所ノ設備アリ、各種病原的細菌ノ検査、必要ナル血清「ソクチン」類ノ製造、疑ハシキ病原材料ノ檢定等ヲ行ヒ、其

ノ數全國ニ八十七ヶ處アリ、以上ノ外細菌検査所トシテ市町村立ノモノ二十五ヶ處私立細菌検査所二十八ヶ處ヲ數フ。

尙府縣廳ノ細菌検査所ニテハ腸「チフス」「バラチフス」等ノ患者ノ早期診斷ノ爲診斷液及胆汁培養基ヲ一般開業醫師ニ無償配布スルモノ多シ。

市町村ニ衛生組合アリ檢病戸口調査、清潔方法消毒方法等ニ際シ警察官吏、市町村吏員ト協力シテ防疫事務ヲ補助ス。

四、患者ノ届出及發見

傳染病患者ノ大部分ハ之ヲ診療セル醫師ニ依リ届出テラルルモ流行的ニ發生シタル場合ニハ官醫ニ於テ健康診斷ヲ爲シ、又警察官ニシテ各戸ニ付檢病的戸口調査ヲ爲シ早期發見又ハ主治醫ナキ患者ノ發見ニ努ム。患者ノ届出及發見ニ關シ腸「チフス」ニ付テ例ヲ示セハ左ノ如シ。

全國腸「チフス」患者發見別調大正九年(一九二〇年)

| 市 | 郡 | 合 | 醫師届出 | 患者申告 | 戶口調査的 | 健康斷 | 檢死 | 案體 | 密告 | 其他 | 計 |
|------|------|------|--------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|---------|
| 部患者數 | 部患者數 | 計患者數 | 一二二四八 | 〇一六 | 四〇八〇 | 〇九五 | 〇〇九 | 〇〇九 | 〇四五 | 一四九二 | 一三、一三五 |
| % | % | % | 九三・三三二 | 一・二 | 二六・六 | 〇・九 | 〇・一 | 〇・一 | 四・〇 | 一〇・六 | 〇〇〇・〇〇〇 |
| 部患者數 | 部患者數 | 計患者數 | 三四、八〇二 | 〇一〇五 | 四、二四六 | 一五八八 | 〇一〇 | 〇一〇 | 一六二 | 四三九 | 四一、四五二 |
| % | % | % | 八三・九六 | 〇・二五 | 一〇・二四 | 三・八三 | 〇・〇二七 | 〇・〇二七 | 〇・三九 | 一・〇六 | 一〇〇・〇〇〇 |
| 部患者數 | 部患者數 | 計患者數 | 四七、〇五〇 | 一一二 | 八、七二六 | 二、七二三 | 〇一三 | 〇一三 | 二二四 | 一、六三一 | 五四、五七七 |
| % | % | % | 八六・二一 | 〇・二二 | 一八・六六 | 五・七三 | 〇・〇三 | 〇・〇三 | 〇・四九 | 一・一六 | 一〇〇・〇〇〇 |

五、病原體保有者ノ發見及處置

病原體保有者ノ取締ニ關シテハ以前ヨリ各府縣ニテ種々ノ方法ヲ講シ殊ニ「コレラ」ニ對シテハ患者ト同様ニ取扱ヒ其ノ他ノ場合ニ於テモ相當ノ取締ヲ爲シツツアリシカ大正十年(一九二一年)傳染病豫防法ヲ改正シ其ノ取締ヲ統一セリ。

「コレラ」發生ノ場合ニ於テハ其ノ家族同居者ハ勿論同宿者同船者及近隣交通關係アル者并戸便所等ヲ共用スル者ニ至ルマテ全部檢便ヲ施行ス「コレラ」保菌者ハ二十四時間以上ノ間隔ヲ置キテ採リタル材料ニ付檢査シタル成績引續キ二回以上陰性ノ結果ヲ見サル限りハ患者トシテ取扱ハル、近年ノ流行ニ於ケル保菌者檢査ノ狀況左ノ如シ。

「コレラ」保菌者發見調

| 流行年別 | 患者總數 | 保菌者數 | 患者百ニ付保菌者數 | 關係便檢數 | 檢便千ニ對スル保菌者發見率 |
|--------------------|-------|-------|-----------|----------|---------------|
| 大正二二〇三年 (一九二三年) | 二、七九八 | 五三八 | 二〇、八% | 二六〇、二〇一 | 二、四二% |
| 大正五二〇六年 (一九二七年) | 一、二六五 | 三、三一九 | 二九、四% | 一一四一、五五八 | 二、九一% |
| 大正九二〇九年 (一九二〇年) | 二、九一二 | 八一 | 二、七% | ? | ? |
| 大正八二〇九年 (一九二〇年) | 四、九六七 | 七二一 | 一四、三% | 七七二、一一〇 | 一、四四% |
| 大正一〇二〇年 (一九二二年) | 九三九 | 二九四 | 三一、三% | ? | ? |

赤痢腸「チフス」等ノ患者ニテ繼續排菌者トナリタル場合ハ左記ノ期間内丈ケ患者ト同様ノ取扱ヒヲ爲ス。

主要症狀消退後赤痢ハ十四日間

同 腸「チフス」「バラチフス」ハ二十一日間

同 「チフテリア」流行性腦脊髓膜炎ハ七日間

右ノ期間ヲ經過シタル者及其ノ他ノ病原體、保有者ハ左記ノ事項ヲ守ル義務ヲ課セラレ且其ノ實行ニ付テハ地方衛生官憲ノ監視ヲ受ク。

赤痢腸「チフス」「バラチフス」保菌者ハ

(イ) 便所ハ成ルヘク専用トシ上圍ノ都度便池ニ消毒藥ヲ投入スルコト

(ロ) 便所ノ手洗水ニ消毒藥ヲ用ユルコト

(ハ) 便器ハ使用ノ都度之ヲ消毒スルコト

(ニ) 尿、尿ニ汚サレタルモノハ之ヲ消毒スルコト

「チフテリア」流行性腦脊髓膜炎保菌者ハ

(イ) 食器、手拭、衣類、寢具、等ハ之ヲ専用トシ衣類寢具ハ時々日光ニ曝スコト

(ロ) 鼻汁、唾痰ノ附着シ又ハ之ニ汚レタル布片類ハ之ヲ消毒シ又ハ便所ニ投棄スルコト

(ハ) 劇場、寄席等多衆ノ集合スル場所ニ立入ラサルコト

六、患家其他ノ消毒

消毒ハ法令上ニ於テハ患家自身ノ義務トナリ居リ當該吏員指示ノ下ニ之ヲ行フ筈ナルモ實際ニ於テハ其ノ技術ノ熟練ト藥品材料ノ準備ノ都合等ヲ慮リ多クハ官憲ノ手ニ依リ直接之ヲ施行スルヲ常トス而シテ此場合ノ費用ハ患家ヨリ徴收スルコトヲ得ルモ現在ニ於テハ之ヲ徴收セサルモノ多シ。

大都市ニ於テハ完全ナル市設ノ消毒所アリ、必要ニ應シ之ヨリ消毒班ヲ派遣シ衣服寢具類等ハ之ヲ消毒所ニ持テ來リテ消毒シ、其ノ他ハ現場ニ於テ各々適應ノ藥品等ヲ用キテ消毒ヲ行フ。

村落等ニ在リテハ多クハ出張ノ當該衛生關係吏員現場ニ於テ消毒ヲ施行ス。

消毒方法等ノ技術ニ關シテハ時々地方的ニ當該關係吏員ノ講習會ヲ開キ他ノ豫防事務ト共ニ教習ヲ行フ。

七、患者ノ療養ト隔離

「コレラ」痘瘡發疹「チフス」「ペスト」ハ殆ント例外ナク之ヲ傳染病院隔離病舎ニ收容シ赤痢腸「チフス」「バチフス」猩紅熱、流行性腦脊髄膜炎モ其ノ八〇、〇%以上ハ前記設備ニ收容治療セラレツツアリ、只「チフテリア」ノミハ旅人宿其他特別ナル家ニ發生シタルモノニアラサル限リ自宅ニ於テ治療セラル、總テ傳染病患者ノ自宅治療ノ場合ハ多クノ府縣ハ左ノ條件ヲ附シ且ツ時々巡視ヲ爲シテ其ノ實行ヲ監視ス。

(イ) 患者専用ノ隔離室内ニ居ルコト

(ロ) 專屬看護人アルコト

(ハ) 主治醫ノアルコト

(ニ) 排泄物其ノ他ノ消毒ヲ行フコト

(ホ) 患者室内ニ他人ノ入ルコトヲ制限スルコト

傳染病院ト隔離病舎ハ實質上大ナル相違ナキモ傳染病院トハ常時之ヲ開設シ相當ノ醫員其ノ他ノ從事員ヲ有シ且相當ノ規模ヲ有スルモノヲ謂ヒ、隔離病舎トハ常時閉鎖シ置クモ患者發生スレハ直ニ開所シテ之ヲ收容シ必要ナル醫員其他ヲ設ケテ不便ナカラシムルモノヲ謂フ、其ノ設立ハ市町村又ハ其ノ組合立ニテ經營シ大正十二年(一九二三年)末ノ現在左ノ如シ。

| | | | |
|-------|-------|-----|--------|
| 傳染病院數 | 一、四八二 | 病床數 | 二五、〇三七 |
| 隔離病舎數 | 八、一三六 | 病床數 | 七四、九一〇 |
| 合計 | 九、六一八 | | 九九、九四七 |

此外當該吏員ノ見込ニ依リ私立一般病院ノ傳染病室ニ收容スルコトヲ得ヘク又自カラ進ンテ此等ノ病院ニ入院シタル者ハ其儘治療ヲ繼續スルコトヲ得ヘシ。

病毒汚染ノ疑アル者ヲ隔離スヘキ隔離所ハ大都市ニ於テハ常設的設備アルモ其ノ他ニ於テハ必要ニ際シ一時的ニ他ノ建物ヲ利用シ又ハ患者ヲ他ヘ收容シ消毒ヲ了シタル自宅ヲ以テ之ニ代フ。

八、法定以外ノ急性傳染病ニ對スル豫防

地方長官ニ於テ其ノ管内ニ傳染病豫防法ニ規定セラレタル十病ノ外豫防方法ヲ施行スル必要アル傳染病發生シタルトキハ其ノ性狀等ハ内務大臣ニ報告セラル、而シテ内務大臣ハ必要ヲ認メタル場合ハ傳染病豫防法ノ全部又ハ一部ヲ限リ或ハ地域ヲ限リ同法令ヲ適用ス。

右ニ依リ法ヲ適用セサル場合ニ於テモ注意スヘキ流行病發生シタルトキハ行政上ノ各般ノ手段ニ依リ適當ナル豫防施設ヲ行フ。

大正七年(一九一八年)ハ大正八年(一九一九年)ノ流行性感胃ノ大流行ノ際ノ如キハ中央地方相應シテ各種ノ豫防施設ヲ爲シ、又大正十三年(一九二四年)流行性腦炎様疾患ノ勃發アルヤ直ニ之カ調査研究ヲ爲シ、其他ノ場合ニ於テモ病症ノ種類ト流行ノ程度ニ應シ必要ナル豫防方法ハ臨機ニ之ヲ行フ。

九、日本ニ於ケル各種急性傳染病ノ發生

以下順次各病ニ付其ノ發生流行ノ概況ヲ述フヘシ。

「コレラ」

日本内地ニ始メテ「コレラ」ノ侵入シタルハ遠ク文政五年(一八二二年)八月和蘭商船ノ瓜哇ヨリ長崎ニ病毒ヲ輸入シタルニ始マルト傳ヘラル、コレヨリ前一八二〇年瓜哇ニ多數ノ「コレラ」患者患生アリ續テ支那ノ廣東、寧波、北京等ニ患者發生ヲ見タルモ當時ノ交通關係等ヨリ考フルニ寧波直接瓜哇方面ヨリ病毒ヲ持チ來タリト傳ヘラルハ正鵠ヲ得タルモノト認メ得ヘシ、即チ Hirsch 氏及 Hensel 氏ノ説ニ依ル世界的流行第一回ノ

餘波ヲ受ケタルモノト見ルヘシ。當時ノ流行ハ相當劇烈ナリシモノノ如ク始メ九州ノ一端ニ入り次テ八月中旬ニハ已ニ山口縣ニ入り同月下旬ニ於テハ大阪府ヲ侵シ同市内ノ死亡者一ヶ月數千人ヲ數ヘ接續ノ郡部ニテ九月十三日及十四日ノ兩日ニテ百三十四人ノ死亡者ヲ出シタル記録等アルヲ以テ當時ノ慘狀ヲ想見シ得ヘシ。日本ニ於ケル二回第一ノ流行ハ安政五年(一八五八年)ニシテ萬延元年(一八六〇年)ニ亘リ全國ニ數十萬ノ患者發生シ就中大阪及江戸(現在ノ東京)ハ流行劇烈ヲ極メ、江戸ノ如キハ七月中旬ヨリ逐日病勢ヲ強メ八月ニ入り一層猖獗ヲ來シ一日ノ死亡千ヲ以テ數フルニ至リ、當時七月ヨリ九月ニ亘ル五十餘日間ニ於テ四百餘ヶ所ノ寺院及九ヶ所ノ火葬場ニ於テ取扱ヒタル死亡者數實ニ二十八萬六千餘ニ及ヒタリト云フ、而シテ之カ流行ノ始メニ付當時長崎ニ居リタル蘭醫「ポンペ ヴァン・ミー・デア・ヴォー」(Pompe Van Mee der Vord)ノ記述ニ依レハ合衆國軍艦「ミスシツピー」號カ同病患者ヲ載セテ支那ヨリ入港シタルニ因スト云フ、本流行ハ恰モ Hirsch 氏ノ世界的第三回ノ於行ニ相當ス。

日本ニ於ケル第三回ノ流行ハ明治十年(一八七七年)九月長崎ニ入港セル英國商船ノ水夫患者ニ始マリ長崎ニ初發シ同地ヨリ漸次蔓延シ九月中ノ患者一、八七一人、十月ニハ殆ント全國ニ發生シ一萬餘人ノ患者ヲ出シタリシカ十二月ニ至リ殆ント終息シ、同年ノ全患者數一萬三千七百餘人ニ及ヒタリ、而シテ其ノ餘焰ハ翌明治十二年(一八七八年)ニ及ヒ九百餘人ノ患者ヲ出シタルカ、更ニ翌明治十三年(一八七九年)三月愛媛縣ニ初マリ大分縣ニ及ヒ遂ニ全國ノ大流行トナリ同年中十六萬二千餘人ノ患者發生シタリ。

以下其ノ後ノ流行ノ主ナルモノニ付記述スヘシ。

年 別 日本發生患者數

對照スヘキ外國ノ流行

明治十四年(一八八一年) 九、三八九

第四回

明治十五年(一八八二年) 五、六三二

第五回

明治十八年(一八八五年) 一三、八二四

第六回

明治十九年(一八八六年) 一五、九二三

第七回

明治廿三年(一八九〇年) 四六、〇一九

第八回

明治廿四年(一八九一年) 一一、一四二

第九回

明治廿八年(一八九五年) 五五、一四四

第十回

明治卅五年(一九〇二年) 一三、三六二

第十一回

大正五年(一九一七年) 一〇、三七二

第十二回

前記ノ内第五回ヨリ第七回ハ世界的流行ノ第五回流行ノ始メニ相當シ第八回ハ世界的流行ノ第六回ノ始メニ相當シ、以上列記以外ノ年ニ於テモ流行前後ノ影響ヲ受ケ少數ノ患者發生アルモ叙上ノ大流行ヲ見レハ明治十一年(一八七七年)長崎地方ノ流行以後明治二十八年(一八九五年)第七回ノ流行迄ノ各期間ハ大體ニ於テ四乃至五年目毎ニ大流行ヲ來シタル形勢ヲ示シ居レルカ、當時ニ於ケル豫防施設ハ現今ニ比シ威力少ナカリシコトヲ想ヘハ以上ノ流行ノ型ハ世界的流行ノ影響ヲ蒙ルコトアルハ勿論ナルモ或自然ノ律ノ存スルナキヤヲ想ハシムルモノアリ。

前記第七回以後ノ二回ノ流行ハ患者數漸減シ且ツ流行年期モ何等ノ週期的事實ヲ示サス。

以上ノ如ク日本ニ於ケル既往百年間ノ「コレラ」流行ハ數年毎ニ大流行ヲ來シタル時代ヨリ漸次間隔ヲ大ニシ來リ近年ニ於テハ全國的ノ大流行ト看做スヘキモノナク大正五年(一九一七年)ノ流行ハ明治卅五年(一九〇二年)以來ノ大ナル流行ナルモ患者數一萬餘ニ過キス其ノ他ハ二乃至三千以下ノ發生數ニテ終熄ヲ告クルニ至リタリ、日本ニ發生スル「コレラ」ハ殆ント全ク其ノ都度海外ヨリ持チ來サレタルモノニシテ未タ嘗テ内地ニ病毒ヲ遺シテ次回ノ流行ヲ來シタルコトナシ試ニ近年ニ於ケル發生流行ノ初發地及初發前後ノ關係ヲ摘記スレハ此ノ關係一層明瞭ナリ。

(一) 大正元—二年(一九一—一九二三年)ノ流行

患者初發ハ大正元年(一九一二年)八月二十九日長崎縣口ノ津港ノ石炭運送船内ノ患者ニシテ其後九州各地ヨリ遂ニ東京、横濱ヲ襲ヒ其ノ餘孽ハ大正二年(一九一三年)ニヨリ患者二千七百餘人ニ及ヒタルカ、當時上海地方ニ於テハ大正元年(一九一二年)ノ五月頃ヨリ多數ノ「コレラ」患者發生アリ、同時ニ長崎、口ノ津、三池ノ各海港檢疫ニ於テモ合計六人ノ患者ヲ發見シタル狀況ナリシカ遂ニ病毒ハ陸上ニ蔓延スルニ至リタリ、而シテ當時日本内地ニ於テハ前年九月以降一人ノ患者保菌者モナカリシモノナリ。

(二) 大正五—六年(一九一六—一九一七年)ノ流行

大正五年(一九一六年)七月二十六日横濱港ニ入港シタルはわい丸ハ入港當時一人ノ「コレラ」發病者アリ當

時風浪劇シク陸地トノ交通全ク杜絶シタル間ニ船内ニ蔓延同船ヨリ前後四十四人ノ患者及三人ノ保菌者ヲ出シ病毒ハ海面一帯ヲ汚シ次テ近縣地方ニ患者發生シ既往十五年來嘗テ見サル患者數ヲ出シタリ。はわい九ハ當時毎週二十人前後ノ「コレラ」患者ヲ出シ居リタル「マニラ」市ヲ發シ臺灣、長崎、神戸等ヲ經テ出發後十五日ヲ經テ入港シタルカ、途中各港ニ於テハ既往一ケ年以上モ「コレラ」患者ノ發生ナカリシヲ以テ「マニラ」ヨリ病毒ヲ輸入シタルコト殆ント疑ヒナキモノト認メラル。

(三) 大正八年(一九一九年)ノ流行

此ノ年八月沖繩、九州方面ニ發シタル「コレラ」ハ漸次各地ニ蔓延シタルカ已往一年九ヶ月間全ク「コレラ」患者保菌者ナク之ニ反シ南支那汕頭、福州方面ハ當時流行劇甚ヲ極メタル狀況リア、同時ニ門司、横濱、長崎、神戸等ノ海港檢疫所ニ於テハ同年九月十九日迄ニ「コレラ」患者十七人同保菌者二十九人ヲ發見セル等ヲ參照スルモ病毒潛入ノ徑路略推察スルヲ得ヘシ。

(四) 大正九年(一九二〇年)ノ流行

前年ノ流行ハ沖繩縣ヲ主トシ本州内地ニ在リテハ患者僅ニ四百餘人ニシテ其ノ年十一月全ク終息シタルカ超ヘテ(大正九年)一九二〇年六月神戸港内ノ帆船ヨリ初發患者ヲ出シ瀬戸内海地方ヨリ各地ニ蔓延シタリ、當時比律賓諸島ハ一月以來ノ流行アリ、バンコック「カルカッタ」「アモイ」臺灣等ニハ相當ノ流行アリタル狀況ヲ綜合スルニ此等海外諸地方ト交通ノ第一要衝ニ在ル神戸港ハ先ツ病毒ヲ輸入シタルモノト認

ラメル。

(五) 大正十一年(一九二二年)ノ流行

此ノ年九月福岡市ニ患者勃發シ長崎地方ニ及ヒ更ニ遠ク千葉縣及東京ニ蔓延シタルカ其ノ前年ハ大正九年(一九二〇年)流行ノ跡ヲ受ケテ長崎縣下ノ一部ニ全數二十九人ノ患者アリ其ノ年十月全ク終息シ爾來一人ノ患者、保菌者ナカリシニ反シ海外地方ニテハ「マニラ」、孟買、蘭貢ハ勿論一層近接セル上海地方ニハ劇烈ナル流行アリ交連其ノ他ノ關係ヨリ見レハ如何ニシテモ同地方ヨリ病毒ヲ持チ來セシモノト説明スルノ外ナシ。

以上最近五回ノ流行發生ノ徑路ニ付説明シタル如ク日本ニ於ケル「コレラ」ノ發生流行ハ常ニ海外ノ影響ヲ受クルモノニシテ近時豫防施設ノ進歩ハ幸ニ大ナル慘害ヲ來サシメサルモ其ノ不斷ノ監視ト侵入ニ處スル準備施設等ニ至リテハ蓋シ多大ノ犠牲ヲ拂ヒ居ルノ止ムナキ狀況ニ在リ。

日本ニ於ケル「コレラ」豫防ノ手段トシテ海外ニ於ケル本病發生ノ狀況ニ注意シ本病發生ノ狀勢ニ應シ其ノ流行劇甚ナルトキハ海港檢疫ニ於テ船客及乗組員ニ對シ糞便検査ヲ施行シ之ニ由テ發見セラルル患者及保菌者少ナカラス。

日本ニ於ケル「コレラ」ノ傳播徑路ハ往時ニ於テモ食用魚類ニ依ルモノ多カリシカ、其ノ後陸上ノ野菜物等カ注目セラレタル時代アリ近年ニ於テハ再ヒ食用魚類ニ依ル傳播ノ場合多ク從ツテ海路ニ依ル「コレラ」蔓

延ノ迅速且ツ廣大ナルコトニ付苦キ經驗ヲ繰返シ居レリ。

日本ニ於ケル「コレラ」ノ防疫手段中特ニ力ヲ注キ居ルハ保菌者ノ檢索ト豫防接種ノ普及ナリ、「コレラ」患者一度發生センカ其ノ關係アル範圍ハ洩レナク檢便ヲ施行シ、其ノ一地方ノ流行終熄シタリト認ムルニハ少クモ一回以上全住民ノ檢便ヲ了スルヲ常トセリ。

「コレラ」豫防接種ハ「コレラ」ビフリオ (Cholera vibrio)ノ加熱又ハ感作「ワクチン」(Carovaccin)ヲ使用シ感染ノ機會多キ職業者等ハ流行近接地ニテ於モ豫メ注射施行セラルルノ有様ニテ近年ニ於テハ何等ノ強制的手段ヲ用ユルコトナク民衆ヨリ進ンテ之ヲ受クルノ傾向アリ。

豫防接種ヲ行ヒタル一例トシテ左ノ數字ヲ掲クヘシ。

大正五—六年(一九一六—一九一七年)流行時ニ於ケル統計

豫防接種第一回終了者 一、〇〇二、二一六 豫防接種第二回終了者 六、四七〇

同 第三回終了者 四二二、六四五

赤痢及疫痢

一、赤痢ナル病症ノ本邦古代ヨリ存在シタルコトハカカル病症ニ對スル治療藥草ノ傳說的ノモノ存スルニ徴シ察知シ得ルモ、明カニ本病ノ流行ニ付記載ノ現レタルハ貞觀三年(八六一年)ニシテ、其ノ後文政十二年(一八二九年)迄ニ斷片的ニ二十九回ノ流行ヲ辿ルコトヲ得、其ノ何レモ一般ノ書ニ記載セラルル程度ニ當時ノ

世人ヲ脅威セルコトヲ考フルニ一地方的又ハ部落的ニ發生シタル流行ハ殆ント毎歲踵ヲ接シテ來リタルコトヲ想見シ得ヘシ。

之ヲ既往四十餘年ノ狀況ニ見ルニ其ノ前半ニ於テハ猶未タ相當ノ流行ヲ繰返シ就中明治卅六年(一八九三年)ノ如キハ全國ヲ通シ十六萬七千餘人ノ患者發生シ當時ノ人口ニ比シ實ニ一萬分ノ三九、七八ニ當ル大流行アリ其ノ翌年復タ十五萬五千餘人ノ患者發生アリタルカ漸次減退シ來リ其ノ後ニ於テハ明治卅二年(一八九九年)ニ十萬八千餘人ノ患者ヲ出シタルヲ最終ノ大流行トシ爾來大ナル流行ヲ見ス、近キ二十年ニ於テハ患者數並ニ人口ニ對スル比例モ順序ヨク減少シ現在ニ於テハ全國ヲ通シテ一ケ年ノ患者發生數一萬二千人前後トナリ人口一萬人ニ對シ二人前後ヲ數フルニ過キス。

患者ニ對スル死亡ノ割合ハ大體ニ於テ二〇・〇乃至二五・〇%ナリ、前記明治卅六年(一八九三年)ノ大流行ノ年ニ於テモ二四・六七%ニシテ現今ニ於テモ大差ナシ。

日本ニ於ケル赤痢ノ流行ハ精確ナル數字ノ記錄アル後ニ於ケル狀勢ニテハ最初九州地方ヲ流行中心トシ漸次東漸シテ中央ヨリ東北地方ニ推移シタル形象ヲ示セリ。

赤痢流行ノ時期ハ年ニ依リ氣候及緯度ノ差等ニ依リ多少ノ差アルモ概シテ五—六月ノ頃ニ始マリ八—九月頃最モ流行シ十一月ニ至リテ漸ク衰フ。

本邦ニ於ケル赤痢ハ其ノ殆ント全部ハ細菌性赤痢ニシテ「アメーバ」赤痢ノ内地ニ於テ發見セラルルハ極メ

テ少數ナリ。

赤痢流行ニ付酸性菌ト非酸性菌トノ割合ハ地方ニ於テモ時ニ依リ場所ニ依リ一定セサルモ本邦ニ於ケル流行地方トシテ注目セラレタル香川県ニ於ケル成績ハ約八三・〇%ノ非酸性菌ヲ見タリ、要スルニ非酸性菌ニ由ルモノハ流行劇烈ニシテ且ツ重症患者多ク、酸性菌ニ由ルモノハ多クハ散在性ニシテ病狀亦輕キモノ多シトハ大體ニ於テ觀察セラレ居ルトコロナリ。

二、疫痢ナル疾病ハ他ノ類似疾病ト混在サルルコト多キモ古來本邦ノ地方的ニ流行ヲ續ケタルコトハ明カナリ、名古屋地方ニハ「ハヤテ」(颶風病ノ義)ト稱シ年來流行ヲ極メ又福岡地方ニ於テモ年々相當ノ流行アリタルモノノ如シ本病ノ本性ニ付テハ本邦醫學者間ニ於テハ年來ノ問題ナルカ、之カ研究ノ始メハ明治十九年(一八八六年)頃ニシテ爾來多數ノ學者ノ研究論題トナリタリ、臨床上急性ニ經過スル中毒症劇烈ナル一種ノ病型ノ存スルコトハ諸學者之ヲ認ムルトコロニシテ、本症ハ主トシテ二歳乃至六歳ノ小兒ヲ侵シ死亡率赤痢ヨリモ高ク殊ニ夏秋ノ期ニ於テ流行的ニ多發スルモノニシテ之ヲ病理的細菌學的ニ獨立ノ疾病ト看做スヘキヤ果タ小兒ノ赤痢ナルヘキヤニ付テハ現在ニ於テ諸學者ノ說必スシモ一致セサルモ大勢ニ於テ小兒赤痢トスルモノ多キ如シ。行政上ノ取扱ニ關シテハ其ノ病狀及流行發生狀況並臨床的ニ疫痢ト診斷セラレタル患者又ハ死體ノ材料中ヨリ相當ノ率ニ赤痢菌ヲ檢出スルコトアル等ノ成績ニ依リ之ヲ赤痢ノ中ニ包含セシム。

腸「チ」フ「ス」

日本ニ古來傷寒(寒ニ傷クノ義)ト稱シ熱性病ニ就テノ記載アルモ此語支那ヨリ傳ハリタルモノニシテ支那ニ於テモ種々ノ解釋アリ、熱性病ニシテ且傳染性ヲ有スル現今ノ腸「チ」フ「ス」ニ一致スルヤ疑ナキ能ハサルモ、其中ニ各種ノ熱性病並傳染性ヲ有スルモノモ含ミタリト考フルヲ得ヘシ、而モ明カニ今日ノ腸「チ」フ「ス」ノミノ流行的發生ト認ムヘキ記錄ナシ。近代ニ於テ稍範圍ノ限局セル急性熱性病ノ流行的發生ハ延寶二年(一六七四年)ニシテ當時ノ記錄ニ依レハ惡寒、發熱、耳症狀、譫語、皮膚發斑、及口渴ト舌帶等ヲ有スル同一型ノ病ノ流行アリタルニ見レハ恐ラクハ腸「チ」フ「ス」ナルヘシ、其ノ後明治ニ至ル迄十一回ノ流行的記事ノ各書ニ記サレタルモノハ恐ラクハ腸「チ」フ「ス」ノ流行ニアリシヤヲ想ハシム、之ヲ西歐ノ疫病史ニ徵スルニ腸「チ」フ「ス」ナル記載ハ十六世紀ノ初期ナルヲ以テ本病ハ古來東西ノ民族間ニ存在シタルモノト見ルヘシ。

本邦ニ於ケル近時ノ流行ハ明治十九年(一八八六年)ニ於テ患者六萬四千餘人、當時ノ人口一萬ニ對シ十七人ノ患者四人弱ノ死者發生セルヲ最大トシ爾來漸減シ來リシモ大正三年(一九一四年)頃ヨリ少シク増加ノ趨勢ヲ示シ近數年ニ於テハ一ケ年約五萬人前後ノ患者發生アリ、人口一萬ニ付八乃至九人ノ患者ト二人弱ノ死者ヲ數ヘ居レリ。患者ニ對スル死亡率ハ大體ニ於テ二〇・〇%前後ニシテ近數年ハ二二・〇%ニ固定シ居ル形勢ナルカ地方ニ依リ一〇・〇%乃至三〇・〇%ノ間ノ差アリ。

地方ニ於ケル流行ノ大勢ヲ見ルニ多數ノ患者發生スル府縣ハ年毎ニ異ナル等ノコトナク、少ナクモ數年間ニ固定スル如キ觀アリ。之ヲ市部ト郡部トニ對照スルニ例年市及町部ニ於ケル患者ノ發生ハ村部ヨリモ多ク

シテ其ノ比市及町ノ一〇ニ對シ村ノ七ニ相當ス。
 本病ノ發生ハ四季絶ユルコトナシト雖八月ヨリ十月ノ間最モ多ク發生シ就中九月ハ例年最モ多キ發生ヲ見
 ヲラ常トス。
 本病ノ傳染徑路ノ明瞭ニ指摘シ得ル場合少キハ勿論ナルモ左表ハ苦心調査ノ成績ニシテ以テ大勢ヲ知ルニ
 足ルヘシ。

腸「チフス」傳染徑路調査成績(大正九年(一九二〇年)ニ終ル) 五ヶ年間ニ於ケル全國患者ニ付

| 水 | 系 | | 傳 | | 染 | | 飲食物 | | 系傳染 | | 接觸關係傳染 | | 不明 | | 合計 |
|----|-------|-------|-------|--------|------|------|------|------|------|-------|--------|------|-------|-------|----|
| | 河水 | 井水 | 其他 | 計 | % | 飲食物 | % | 從事 | 其他 | 計 | % | 不明 | % | | |
| 市部 | 二二 | 五三 | 三三 | 九八 | 三〇・七 | 九七 | 四〇・〇 | 一三五 | 一八五 | 二九〇 | 三〇・一 | 七五 | 一、九六九 | 一〇〇・〇 | |
| 郡部 | 四三三 | 二七七 | 二七六 | 九八六 | 二七・五 | 七、五七 | 一、五九 | 三、六七 | 九、七六 | 一三、九二 | 二、六四 | 四、七二 | 五、四六 | 一〇〇・〇 | |
| 計 | 四、四五五 | 三、一〇三 | 三、〇〇九 | 一〇、七五七 | 一四・〇 | 八、四四 | 二、三三 | 四、八三 | 二、八二 | 六、五五 | 二、八二 | 五、〇九 | 七、一五 | 一〇〇・〇 | |

腸「チフス」患者ノ約八〇・〇％ハ例年傳染病院又ハ隔離病舎ニ收容治療セラレ居ルモ、死亡率其ノ他ノ關
 係ニ於テ多少ノ興味アルヲ以テ全國ノ比ヲ掲記スヘシ。

自大正五年(一九一七年)至大正九年(一九二一年)腸「チフス」患者死者ニ對スル統計

患者數一年ノ平均 三、八、九〇七 病院病舎收容 八、四二〇 自宅療養 計 四七、三二七

全患者百ニ付收容% 八二・二一 一七・七九 一〇〇・〇〇
 死者數一年平均 七、六七四 二、二四一 九、九一五
 患者百ニ付死者% 一九・七二 二六・六二 二〇・九五

腸「チフス」ニ對スル防疫上ノ施設トシテ上水道下水道ノ完整、便所ノ位置構造ノ改良等ニ力ヲ注キ居ルハ
 勿論ナルカ、其ノ他ノ特殊ナル事項トシテハ豫防接種ノ獎勵ト保菌者ノ檢索作業ナリ。

腸「チフス」ノ豫防接種ヲ一般人ニ大數ニ施行スルニ至リタルハ明治四十一年(一九〇九年)頃ヨリニシテ主
 トシテ腸「チフス」菌ノ加熱「ワクチン」ヲ用キタリシカ近時ニ至リ感作「ワクチン」モ用キラレ豫防接種施行
 ノ場合及其ノ範圍モ著シタ多キヲ加ヘタリ、殊ニ近時ニ於テハ各地方廳ノ衛生課附屬細菌檢査所ニ於テ之ヲ
 製造シテ、流行又ハ流行ノ兆アル部落ノ一部又ハ全部ニ之ヲ施行スルモノアリ今之ニ依リ著シク流行ヲ阻止
 シ又ハ患者發生ヲ減シタル實例ノ二三ヲ舉クヘシ。

(第一例) 神奈川縣下各地患者發生部落

大正四年(一九一五年)ヨリ大正八年(一九一九年)迄ノ人口一ヶ年平均三二、三三四ニシテ接種施行前ノ人
 口一萬對ノ患者%ハ五・七ナリシカ、施行後ノ同年期間ノ人口一萬對ノ患者一・七トナリ各年ニ於テモ著シク
 減少ヲ示シ居レリ、而シテ其ノ接種施行部落七ヶ村二百七部落ニシテ爾後發生全ク熄ミタル部落百五ヲ數フ。

(等二例) 新潟縣中蒲原郡菅名村

同村ハ戶數七百餘人口四千百餘ヲ數フル村ニシテ明治四十四年(一九一一年)頃腸「チフス」患者毎年發生シ

接種施行直前ノ數年間ニ於テハ每年少クトモ五人多キハ三十八人ノ患者ヲ發生シタリ、大正六年(一九一七年)及大正七年(一九一八年)ニ亘リ三歳以上六十歳迄ノ村民全部ニ豫防接種ヲ施行シタルカ一九一七年以降ノ數年間ニ於テ一九一九年ニ三人ノ患者ヲ出シタルノミ其ノ他ハ一人ノ患者ヲ出ササルニ至レリ。以上ノ如キ實例ハ枚舉ニ暇アラサルモ猶大數ニ統計セラレタルハ我陸軍ノ成績ナリ。我陸軍ニ於ケル腸チフス豫防接種ハ明治四十一年(一九〇九年)ニ始マリタルカ其ノ前後ニ於ケル患者ノ比ノ左ノ如シ、

日本陸軍兵員腸チフス豫防接種前後ノ成績

| 年次 | 一九〇七 | 一九〇八 | 一九〇九 | 一九一〇 | 一九一一年 | 一九一二年 | 一九一三年 | 一九一四年 | 一九一五年 | 一九一六年 | 一九一七年 | 一九一八年 | 一九一九 | 一九二〇 | 一九二一年 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 兵員數 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 | 五,七〇〇 |
| 患者數 | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ? |

日本海軍ニ於ケル常時一ケ年毎ニ廣ク行フニ至リタル大正五年(一九一六年)以降ニシテ接種ハ腸チフス及「バラチフス」A、B三種菌混合液ニシテ其ノ前後ノ成績左ノ如シ。

日本海軍豫防接種成績

| 年次 | 兵員數 | 患者數 | 「同」上「バラチフス」A患者 | 「同」上「バラチフス」B患者 |
|------|-------|-------|----------------|----------------|
| 一九〇八 | 七,〇〇〇 | 三,〇一〇 | 四,九九五 | |
| 一九〇九 | 二,六三三 | 二,七一九 | 〇,五四 | |

| | | | |
|------|-------|-------|------|
| 一九一〇 | 四,七八 | 二,二三三 | |
| 一九一一 | 二,三二七 | 一,〇〇〇 | 七,九三 |
| 一九一二 | 四,三六六 | 二,二二一 | 一,四七 |
| 一九一三 | 二,一八 | 一,一九九 | 三,四一 |
| 一九一四 | 二,二四 | 六,八一 | 五,七九 |
| 一九一五 | 二,〇二二 | 一,二二六 | 二,〇四 |
| 一九一六 | 三,三三九 | 〇,六六 | 一,三四 |
| 一九一七 | 〇,三一一 | 〇,三一一 | 〇,二六 |
| 一九一八 | 〇,一九 | 〇,〇五 | 〇,一九 |
| 一九一九 | 〇,一六 | 〇,〇六 | 一,二二 |
| 一九二〇 | 〇,六二 | 〇,〇二 | |
| 一九二一 | 〇,四一 | 〇,〇五 | |

保菌者ノ檢索ハ多クハ患者發生ノ際其ノ同居者其ノ他ノ關係者ニ糞便檢査ヲ施行スルモ場合ニ依リ既往ノ發生患家又ハ一部落全體ニ施行スルコトアリ、之等ノ檢査ニ關スル地方廳ノ命令ハ明治四十二年(一九〇九

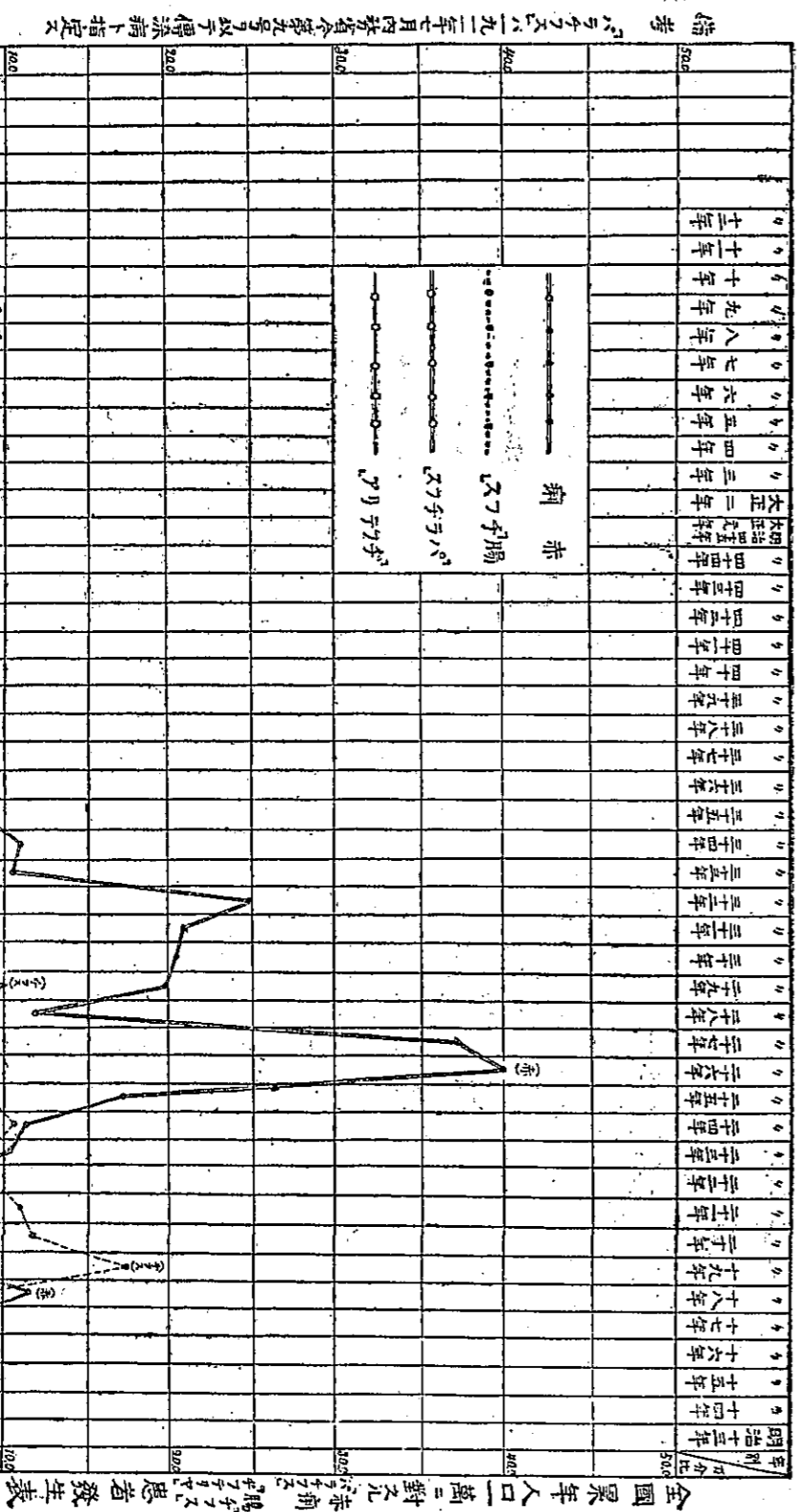
年)頃既ニ大阪府其ノ他ノ地方ニテ縣令ヲ發布シテ之ヲ行ヒ其ノ他ノ府縣ニテモ前記ノ範圍ニ隨時之ヲ施行シ居タルカ大正十一年(一九二二年)傳染病豫防法改正ノ際該法律中之ヲ明記シタルヲ以テ一層之カ檢査及取締ヲ統一的ニ行フニ至レリ一例トシテ京都府下ニ於ケル成績ヲ摘記スヘシ。

| | | | |
|---------|---------|---------|-------|
| 大正 七年 | 大正 八年 | 大正 九年 | 計 |
| (一九一八年) | (一九一九年) | (一九二〇年) | |
| 檢査人員 | 五、六五 | 二、一五五 | 一、〇〇八 |
| 保菌的發見數 | 四 | 二五 | 三 |
| 發見% | 〇・七一 | 一・一六 | 〇・三〇 |
| | | | 〇・八一 |

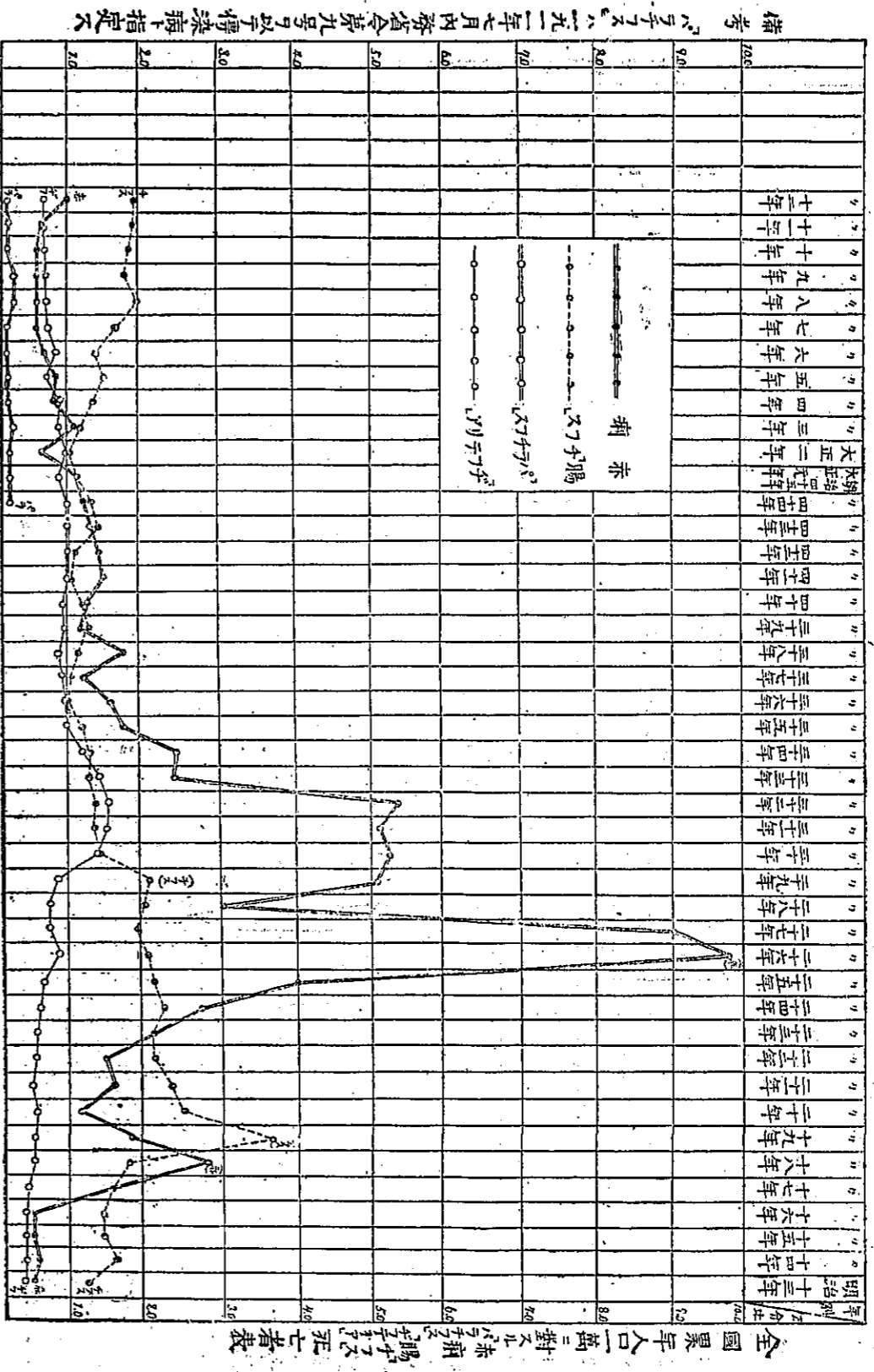
「バラチフス」

「バラチフス」ノ臨床家及細菌學者ヨリ注意ヲ喚起セラレタルハ西歐ニ於テモ一九〇〇年頃ヨリナルカ、日本ノ醫學界ニ於テ注目セラレタルハ明治卅二年(一八九九年)腸「チフス」患者ヨリ發見セル一種ノ細菌ニ付記載アリ其ノ後ニ於テモ明治卅三年(一九〇〇年)多數ノ學者ニヨリ注目研究セラレタルカ明治卅七年(一九〇四年)故柴山博士等ノ研究ニ依リ本邦ニ於ケル「バラチフス」菌ノ存在ヲ確定シタリ。

斯ノ如クシテ本邦ニ於ケル「バラチフス」ノ存在ハ漸次注意セラレ、加之細菌學的診斷ノ普及ニ伴ヒ愈々多キヲ加ヘ明治四十四年(一九一一年)政府ハ法律ヲ以テ取締ルヘキ傳染病ト指定シ今日ニ至レリ。法令發布ノ當年ニ於ケル全國ノ患者數ハ二千百餘人ニ過キサリシカ大正三年(一九一四年)頃ヨリ六千人前後トナリ、爾



備考 「バラチフス」一九二二年七月内務省令第九号ヲ以テ傳染病ト指定ス



來多少ノ消長アルモ大體ニ於テ例年同數ノ患者ヲ見ツツアリ。

「バラチフス」ノ流行ハ大體腸「チフス」ニ同シク例年九月ヲ中心トスルコト多ク、其ノ患者百ニ對スル死亡ハ一〇・〇%乃至二一・〇%ノ間ニアリ。

本病ノ豫防ニ關シテハ大體腸「チフス」ト同様ニ施行シ居ルハ勿論ナルカ豫防接種モ時々行ハレツツアリ、我陸海軍ニテハ近年ハ腸「チフス」「バラチフス」AB型混合「ワクチン」ヲ製造シ全兵員ニ對シ毎年一回宛豫防接種ヲ行ヒツツアリ。

「チフテリヤ」

「チフテリヤ」支那ニ在リテハ古代ヨリ醫家ノ注目スルトコロナリシ如キモ日本ニ於テ初メテ本病ニ付記載アルハ平安安朝代(七八一年—一八一一年)ナリ、其後徳川氏初世及中世(一六一五年—一七八八年)頃迄ハ記載ナク寛政年間(一七八八年以降)頃ヨリ本病ノ記載アルハ恐ラクハ當時迄大ナル流行ノナカリシモノト認メラル文化年間(一八〇八年頃)ノ書ニハ本病ト認メラルル記載アリ、其ノ後ニ於テハ相當ノ流行アリシモノノ如ク各種ノ書ニ記述セラレ居ルモ他ノ咽喉ノ諸症モ混セシモノモアリシ如シ、本病ノ傳染スルコトヲ知リタルハ近世ノコトニ屬ス、之ヲ西歐ノ記録ト對比スルニ中古ニ至リ伊太利ノ醫學振興シ本病ノ研究大ニ進ミタルカ十七世紀ノ「スペイン」ノ大流行(當時ノ稱呼Morbus Asiaticus Garitilis)アリ次テ西歐ノ各國ニ蔓延セルハ千

七百五十年ノ頃ナルヲ以テ日本ノ近世ニ於ケル流行ハ西歐ノソレニ約五十年後ノコトナルヘシ

近年ニ於ケル本病發生患者數ヲ譯ヌルニ明治十三年(一八八〇年)以降一ケ年二千人前後ノ患者ハ激増シテ明治廿九年(一八九六年)ニハ八、六一三人ヲ數ヘタルカ、其ノ翌年タル明治三十年(一八九七年)ニハ俄然トシテ患者數一萬五千餘人トナリ明治卅二年(一八九九年)ニハ二萬人ヲ超ヘタルカ、其ノ後漸減シ年々一萬五千人前後トナリ近數年ハ更ニ減少ヲ示シツツアリ、人口ニ對スル患者比例モ明治三十年(一八九七年)ニハ急騰シテ人口一萬ニ付三、四九ヲ示シタリ、コノ現象ハ單ニ國內一般ニ流行甚シカリシト解シ去ルニハ多少解シ難キ點アリ之ヲ他ノ關係ニ求ムルニ血清療法ノ普及ト因縁少カラサルヲ想ハシム、即チ(明治廿七年)一八九四年ニハ北里博士ニ依リテ製造セラレタル「ヂフテリア」血清ハ始メテ一般ニ交付セララルルニ至リ更ニ明治廿九年(一八九六年)ニハ國立血清藥院ノ設立アリ本治療血清ヲ一般ニ廣ク賣下クルニ至リタルカ、別表ノ示ス如ク其ノ前後ノ年ヲ劃シテ本病患者ノ死亡率ハ激減シタリ、斯ノ如ク本病治療血清ノ普及ト共ニ本病患者ノ死亡率ノ激減シタル一轉機ハ恰モ本病患者數ノ激増シタル年ニ相當スルハ何等カノ關係ヲ有スルモノト認ムルヲ得ヘシ之ヲ當年ニ於ケル月別發生割合、地方別發生狀況ニ徵スルモ比較的東京及其ノ附近ノ多キ外一般ニ患者數多キヲ示スノミニテ從來ノ發生分布狀況ト大差ナキ等ヲ見レハ治療方法ノ確立ト共ニ本病ノ取扱上ノ一轉機ヲ來シタルニアラサルナキヤ、同時ニ其後ニ於ケル三十ケ年ニ近キ累年ノ發生ニ於テ斯ク倍加又時ハ半減シタルコトナキ等ノ事實ハ一層コノ感ヲ深カラシムルモノアリ。

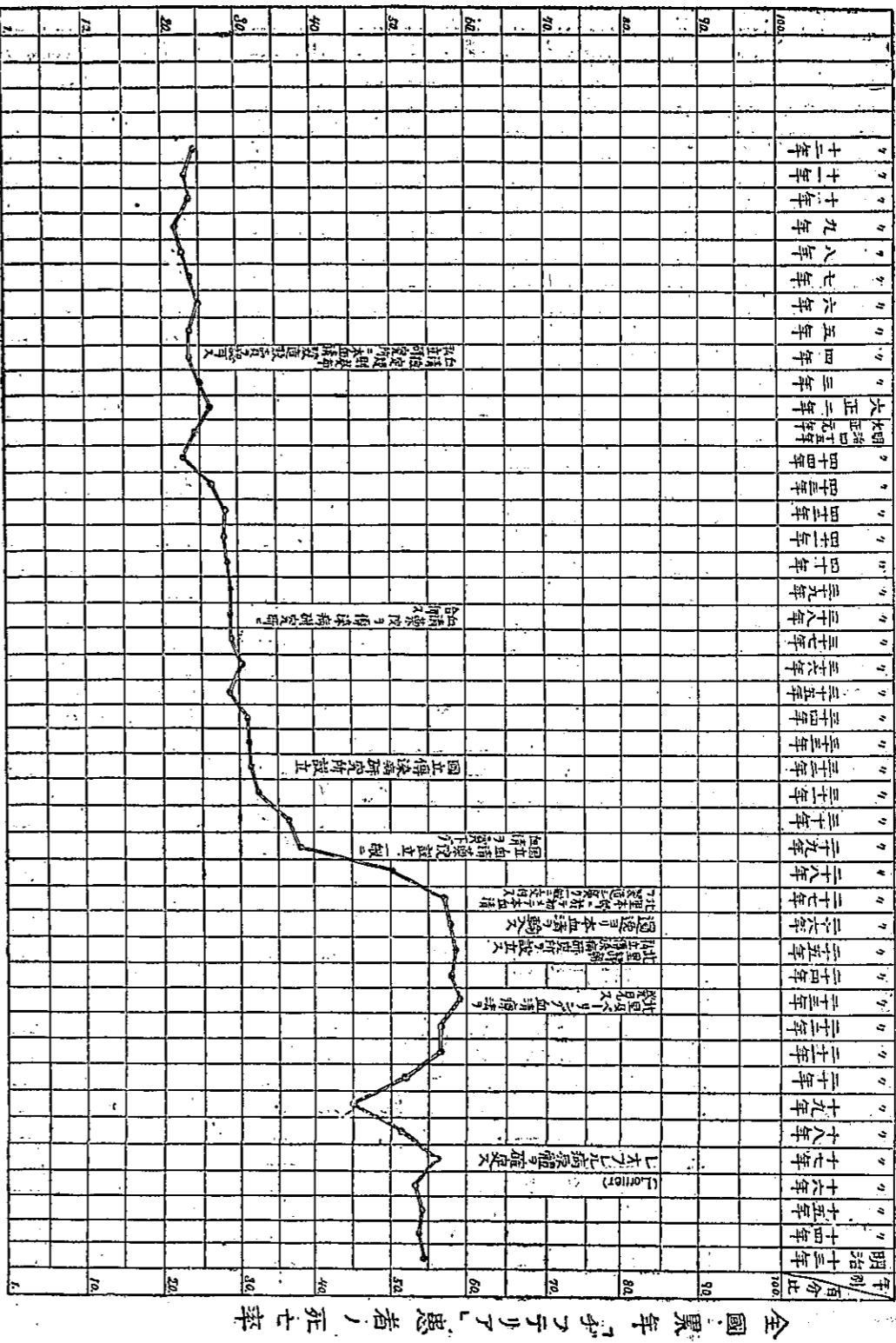
本病ノ死亡率ニ於テハ前述ノ如ク血清療法普及以前ハ常ニ五〇・〇%以上ヲ示セシモ普及ノ程度ニ應シテ死亡率低下シ來リ遂ニ近時ノ率トナリ固定シタル傾アリ。

「ヂフテリア」患者死亡率ノ變遷

| | | |
|------------------------------|------|----------------|
| 明治十三年(一八八〇年) 〓 明治廿七年(一八九四年) | 十四年間 | 五八・七四 〓 五一・四九% |
| 明治廿八年(一八九五年) | 一ケ年 | 四九・五九% |
| 明治廿九年(一八九六年) | 一ケ年 | 三八・二七% |
| 明治三十年(一八九七年) | 一ケ年 | 三六・〇二% |
| 明治卅一年(一八九八年) | 一ケ年 | 三二・七七% |
| 明治卅二年(一八九九年) 〓 明治四十二年(一九〇八年) | 十ケ年間 | 三一・六六 〓 二七・九四% |
| 明治四十八年(一九〇〇年) 〓 大正八年(一九一九年) | 十ケ年間 | 二六・五四 〓 二三・〇六% |
| 大正九年(一九一九年) 〓 大正十二年(一九二三年) | 四ケ年間 | 二四・三五 〓 二二・六七% |

之ヲ西歐ノ例ト比較スルニ等シク本病死亡率ノ激減ハ一八九五年ヲ劃シテ著名ナルモノアリ、即チ血清療法ノ偉功ハ全世界ヲ通シテ人類ニ絶大ノ幸福ヲ與ヘタルヲ明シ居レリ。

本邦ニ於ケル本病ノ流行季節ハ例年十月頃ヨリ發生シ十二月ニ於テ頂點ニ達シ次年ノ三月又ハ四月迄流行ヲ續ケ、八月ヲ以テ最少數ヲ示ス本病發生ノ地方別大勢ハ例年概シテ東北、北海道ノ地方ニ多クシテ西漸ス



ルニ從ヒテ減少シ九州地方ニ於テ發生最モ少ナシ。

「ヂフテリア」血清ノ使用普及ニ關シテハ國立傳染病研究所及北里研究所及他ノ製造ニ係ル免疫血清ヲ常ニ不足ナク供給スルコトニ注意シ、且地方ニ訓令シテ町村役場等ニ之カ常時備付ヲ促シ卒急ノ場合ニ應セシムルコトトナシ居レリ。

痘 瘡

痘瘡ノ初メテ日本ノ文籍ニ載セラレタルハ天平七年(七三五年)ニシテ當時ノ流行ハ九州ノ一角福岡縣下ニ始マリ諸國ニ及ヒタル如シ、越ヘテ天平九年(七三七七年)ニモ流行アリ何レモ同一地方ニシテ恐ラクハ朝鮮地方ヨリ病毒ヲ輸入シタルモノト傳ヘラル、然レ共史家ノ詮索ニ依レハ右ハ大ナル流行ノ記録ニシテ其以前ニ於テモ本邦ニ同様ノ病症發生シタルコトヲ記シ居ルモノアリ。

本病ノ流行ハ前記天平七年(七三五年)ヲ第一次流行トスレハ天保九年(一八三三年)迄ニ五十六回ヲ數ヘ、其後明治ニ至ル間ニ於テ屢次ノ流行アリタル如ク安政六年(一八五九年)幕府ニ於テ種痘館ヲ造リタル等ニ見ルモ引續キ發生アリタルヲ知ルヘシ、而シテ昔時約三十年毎ノ流行ハ漸々六乃至七年ノ流行週期トナリ其ノ間ニ連年小流行アリタルモノ、如シ。

本邦ニ正確ナル傳染病統計ノ存スルニ至リタル明治十二年(一八八〇年)ヨリ現在ニ至ル痘瘡流行ノ跡ヲ繹スルニ、近キ四十年間ニ於テ六回ノ大流行アリ即チ明治十九年(一八八六年)明治二十年(一八八七年)ノ流

行ハ合計十一萬三千餘人ノ患者ヲ出シ超ヘテ六年ヲ經タル明治廿五年(一八九二年)ヨリ明治二十七年(一八九四年)ニ亘ル流行ハ合計八萬八千餘人ノ患者ヲ出シ、其後三年ヲ經タル明治三十年(一八九七年)ニ四萬一千餘人ヲ出シタリ、其後ニ於テハ大ナル流行ナカリシモ明治四十一年(一九〇八年)ニ一萬八千餘人ヲ出シタル流行アリ。近キ數年ニ於テハ少キハ六百餘人多キハ三千餘人ノ患者發生ヲ見タルカ明治卅四年(一九〇一年)頃及大正元年(一九一二年)頃ニ於テ患者發生少ナカリシ時ハ全國ヲ通シ一年間僅ニ十數人又ハ數十人ニ過キサリシコトアリ累年ノ流行ヲ大觀スルニ近數年ニ於テハ大流行モナキモ却ツテ平均相當數ノ患者發生ヲ見ル形勢ヲ示シ居レリ、然レトモ明治四十一年(一九〇八年)以降ニ於テハ人口一萬ニ對シ一人以上ノ患者ヲ出シタルコトナシ。

本邦ニ於ケル痘瘡ノ死亡率ハ年ニ依リ異ナルモ大體ニ於テ一〇・〇%乃至三〇・〇%ヲ示シ大流行時ニ於ケル死亡率亦二五・〇%前後ヲ示セリ。

痘瘡流行ノ季節ハ大體ニ於テ例年二月三月ヲ中心トシテ多發シ、時ニ五月六月ヲ最多トスルコトアリ、稀ニハ十二月又ハ一月ナルコトアルモ大多數ニ於テ春期ニ流行スルヲ常トス。

近時ニ於ケル痘瘡患者發生及蔓延ノ經路ヲ調査スルニ多ク流行ノ端ヲ發スルハ常ニ海外朝鮮、支那方面ヨリ病毒輸入ニ端ヲ發スルコト往昔ト異ナラス、大正十二年(一九二三年)ノ流行ハ朝鮮ヨリ歸來セル漁夫ニ依リ蔓延ノ源ヲ爲シ別ニ同年十月北海道方面ニ數百ノ患者生發ヲ見タルハ露領沿海州ヨリ歸來シタル漁夫ニ始マレリ。

輸入セラレタル病毒ハ主トシテ未種痘者間ヲ辿リテ蔓延スルモノ多シ種痘法ニ依リ種痘ヲ強制シ居ルニモ係ラス今猶斯ル未種痘者ヲ存スルハ第一期ノ種痘期ニ達セル年齢者以外ニ於テ戶籍法ニ依ル人口ノ整理、就中住所ノ變換シ易キ水上生活者等ノ移動整理完全ニ行ハレ難ク從ツテ相當年齢ニ達スルモ種痘ヲナサザリシ者等ノ存スルニ因ルモノナルヘシ。

種痘ノ普及

明治七年(一八七四年)九月文部省達第二十號ヲ以テ種痘規則布達セラレ、初種、再三種、善感、不善感ノ分類ヲ定メ種痘證ノ交付等ニ規定セルカ翌明治八年(一八七五年)十月ヨリ同年十二月ニ至ル間ノ種痘數二十九萬五千餘人ニシテ當時ノ人口ニ對シ一・二%ニ當ル、而シテ當時ニ於ケル善感率初種、再三種ヲ合スレハ九六・〇%以上ヲ示シタリ、翌九年(一八七六年)ノ一月ヨリ六月ニ至ル種痘ニ於テハ已ニ全人口ノ二・二%ニ種痘シ、初種ノ善感九六・六五%再三種ノ善感二六・四七%ヲ示シタリ。

其後衛生事務ハ内務省ニ移リ内務省布達ヲ以テ種痘ニ關スル規定ヲ勵行シ居リシカ明治十八年(一八八五年)十一月從來ノ種痘ニ關スル規定ヲ統一シテ新ニ種痘規則ヲ發布シ翌明治十九年(一八八六年)ヨリ之ヲ施行シタリ、之現行種痘法發布迄行ハレタル規則ナリ。

明治七年(一八七四年)種痘ノ規定發布後十年明治十六年(一八八三年)ニ於ケル幼少年齡級ノ未種痘者割合左ノ如シ。

| | | | | |
|----------------------------|------|------|------|-----------|
| 明治十六年(一八八三年)各年齡千人ニ對スル未種痘者調 | | | | |
| 一歲未滿 | 二歲未滿 | 三歲未滿 | 四歲未滿 | 四歲以上十五歲未滿 |
| 一四・〇% | 六・八% | 四・一% | 三・一% | 七・七% |

明治十八年(一八八五年)統一セル種痘規則發布セラレ當時ノ種痘規則ハ定期ノ強制種痘トシテハ三回ニシテ即チ一歳未満ノモノヲ初種痘トシ、五歳乃至七歳ノ間ニ再種痘ヲ行ヒ、十歳乃至十二歳ニ於キ再三種痘ヲ行ヒ、其外流行時ニ於テ臨時種痘ヲ行フ明治四十三年(一九〇九年)種痘法ノ發布アリ翌明治四十三年(一九一〇年)一月ヨリ之ヲ施行シ同時ニ在來ノ種痘規則ヲ廢シタリ。

當時ニ於ケル種痘人員ハ流行ノ狀勢ニ依リ臨時種痘ノ關係上毎年ノ種痘人員ニ著シキ異動アルモ、多キトキハ全人口ノ三六・〇%以上ヲ種痘シタルコトアリ、又種痘施行義務者ニ付テハ毎年其ノ八〇・〇%乃至八七・〇%前後ニ對シ種痘ヲ了シタリ。

現行種痘法明治四十二年(一九〇九年)四月法律第三十五號ノ概要ヲ示セハ左ノ如シ。

定期種痘ハ左ノ三回ナリ

第一期 出生ヨリ翌年六月ニ至ル間、但シ不善感ナルトキハ翌年六月ニ至ル間ニ更ニ種痘ヲ行フコト

第二期 數ハ歳十歳、但シ不善感ナルトキハ翌年十二月ニ至ル間ニ更ニ種痘ヲ行フ

學校、育兒院又ハ之ニ準スヘキ場所ノ首長、及教育、監護又ハ備使ノ目的ヲ以テ人ヲ寄寓セシムル者ハ其ノ下ニ在ル未成年ノ種痘義務者ニ種痘ヲ爲サシムル義務アリ。

種痘ハ市町村ニ於テ行ヒ之ヲ公種痘ト稱シ、又一般醫師ニ付種痘シタルモノモ之ヲ私種痘ト爲ス、地方長官ハ豫防上必要ト認ムルトキハ種痘ヲ受クヘキ者ノ範圍及期日ヲ指定シテ臨時種痘ヲ命令スルコトヲ得ヘシ

其ノ他疾病事故ノ爲種痘ヲ猶豫スル場合ノ規定及種痘ヲ怠リタル者ニ對スル所罰等ノ規定アリ。

之ヲ取扱ノ方法ハ明治四十二年(一九〇九年)十二月内務省令第二十六號種痘法施行規則ニ依リ等規定セラレ特ニ種痘ノ濟否ハ戶籍簿ニ符合ヲ記入スル等ノ規定アリ。

近年ニ於ケル種痘成績及善感率左ノ如シ。

| 年次 | 第一期種痘義務者百中種痘 | 第一期種痘善感率 | 第二期種痘義務者百中種痘 | 第二期種痘善感率 |
|-------|--------------|----------|--------------|----------|
| 大正七年 | 八八・二八% | 九〇・四〇% | 九三・四七% | 五七・九〇% |
| 大正八年 | 八八・一五% | 九〇・八八% | 九二・八三% | 五三・八三% |
| 大正九年 | 八八・八〇% | 八七・九四% | 九三・九一% | 五〇・四三% |
| 大正十年 | 八八・二八% | 九三・〇六% | 九四・〇一% | 五五・三五% |
| 大正十一年 | 八七・二九% | 九四・五三% | 九三・二八% | 五九・九六% |

發疹「チフス」

本病ノ特性トシテ戰後又ハ飢饉ニ際シテ猛烈ナル流行ヲ來スコトヲ考フレハ日本ニ在リテハ神武天皇五十八年紀(西曆紀元前四百十九年)ノ疫病ノ大流行以來屢々之ヲ見タル如キモ其ノ何レモカ果シテ本病ナリシヤハ確言スル能ハス崇神天皇(九三年)大流行アリ其後二千年ノ間戰亂又ハ飢饉ニ際シテ急劇ニ發生セル疫病ノ大流行ノアリタルハ或ハ本病ニ非ルヤヲ想ハシムルモ確證スル程ノ記載ヲ缺ク。

安政六年(一八五九年)青森縣下弘前市地方大凶作ニ際シ本病ノ流行アリシ傳説アリ、當時大人ノ惡性麻疹ト稱シ死者一日五十人ヲ數ヘシコトアリタル由ナルヲ以テ本病ノ流行ハ少クモ明治以前ニ於テモ所々ニ之ヲ存シタルヲ想像スルニ足ルヘシ。

本病ノ學術的ニ記載セラレタルハ明治十四年(一八八一年)「ベルツ」氏カ東京附近ニ於テ四人ノ本病患者ヲ診定シタルニ始マル如シ、同年頃露國船ニ依リ山形縣地方ニ新ニ病毒ヲ輸入シ、又日清日露ノ兩戰後ニモ戰地歸還兵ニ依リ本病毒ヲ齎シタル實證アリ衛生局年報ニ依レハ明治十二年(一八七九年)ヨリ明治十四年(一八八一年)ノ三ケ年間ハ全國ニ千四百乃至二千四百ノ患者發生アリ、當時ノ主要ナル流行地方ハ東京ヲ中心トシタル神奈川、埼玉、千葉、群馬ノ各縣宮城、福島、山形、石川ノ東北、北陸地方及兵庫(主トシテ監獄内發生)愛媛、山口ノ關西地方ニシテ其他静岡、愛知、三重ノ各縣下ニモ相當數ノ發生アリ。

明治十九年(一八八六年)ニ於ケル本邦ノ患者數八、二二五人ニシテ其ノ前後數年間ハ二乃至三千餘人ノ患者發生計數セラレ居リシカ明治廿三年(一八八九年)頃ヨリ患者數激減シ流行ト認ムヘキモノナキニ至レリ。然ルニ大正三年(一九一四年)二月東京市内貧民部落ニ本病發生流行シ次テ各地ヨリ同一病症ノ發生アリ、特ニ北海道青森等ハ流行猖獗ヲ極メタルカ要之當年ノ流行ハ寧ロ北部地方ニ初發シ漸次南進シ來リシモノナリ、而シテ近年ニ於テハ流行的發生ナキモ山形、青森、秋田地方ニ稀ニ患者ノ發生ヲ見ルノミ。

猖紅熱

本邦ニ於テ稍明瞭ニ發病ノ記載セラレタルハ(明治廿一年)一八八七年ニシテ其後明治廿七年(一八九四年)戰後ノ頃ヨリ其ノ存在ヲ確認セラレタリ。

明治三十年(一八九七年)傳染病豫防法ノ改正當時本病ヲ強制届出ノ病症ニ加ヘタルヨリ年々ノ數字明ナレリ、即チ其ノ年ニ於テハ一ケ年ノ發生數三十七人ナリシカ其後漸増シテ五年後ノ明治卅五年(一九〇二年)ニハ百二十五人トナリ明治四十年(一九〇七年)ニハ五百餘人ヲ數フルニ至リ(一九〇九年)明治四十二年以後ハ現今ニ至ル迄千人ヲ降ルコトナシ。

本邦ニ於ケル猩紅熱患者ノ發生ハ全ク散發的ニシテ地方ニ依リ年ニ依リ濃淡ノ差少ナシト雖モ季節ニ付テハ例年十一月、十二月ヲ最多數トシ續イテ一月乃至六月ノ間相當數ヲ見ルモ八月、九月ノ患者發生數著シク少キハ例年ノ現象ナリ。

本病ノ死亡率ハ著明ニ興味アル一種ノ波ヲ呈ス。

明治三十年(一八九七年)以降ノ猩紅熱死亡率大勢

自明治三十年自(一八九七年) 九ケ年間死亡率 八・二% 九・四六% (一九〇〇年ノミ異常ニ高ク一五・五八%ヲ示ス) 平均 九・二二

自明治卅九年自(一九〇六年) 七ケ年間同 一・二% 二・一% 九・三% 平均 二七・〇五

自大正二年自(一九一三年) 七ケ年間同 四・一七% 九・二三% 平均 六・二四

本病ニ侵サルルモノハ本邦ニ於テハ四乃至七歲位ノ小兒ニ最モ多ク二十歲位迄ハ屢々患者ヲ見、三、四十歲

以後ノ患者ハ甚タ稀ナリ。
 本邦ニ於ケル猩紅熱ハ比較的輕症ニシテ時ニハ後發セル腎臟炎ノ發生等ニ依リ醫治ヲ受ケ遡ツテ診定セラ
 ルル如キ場合アリ。

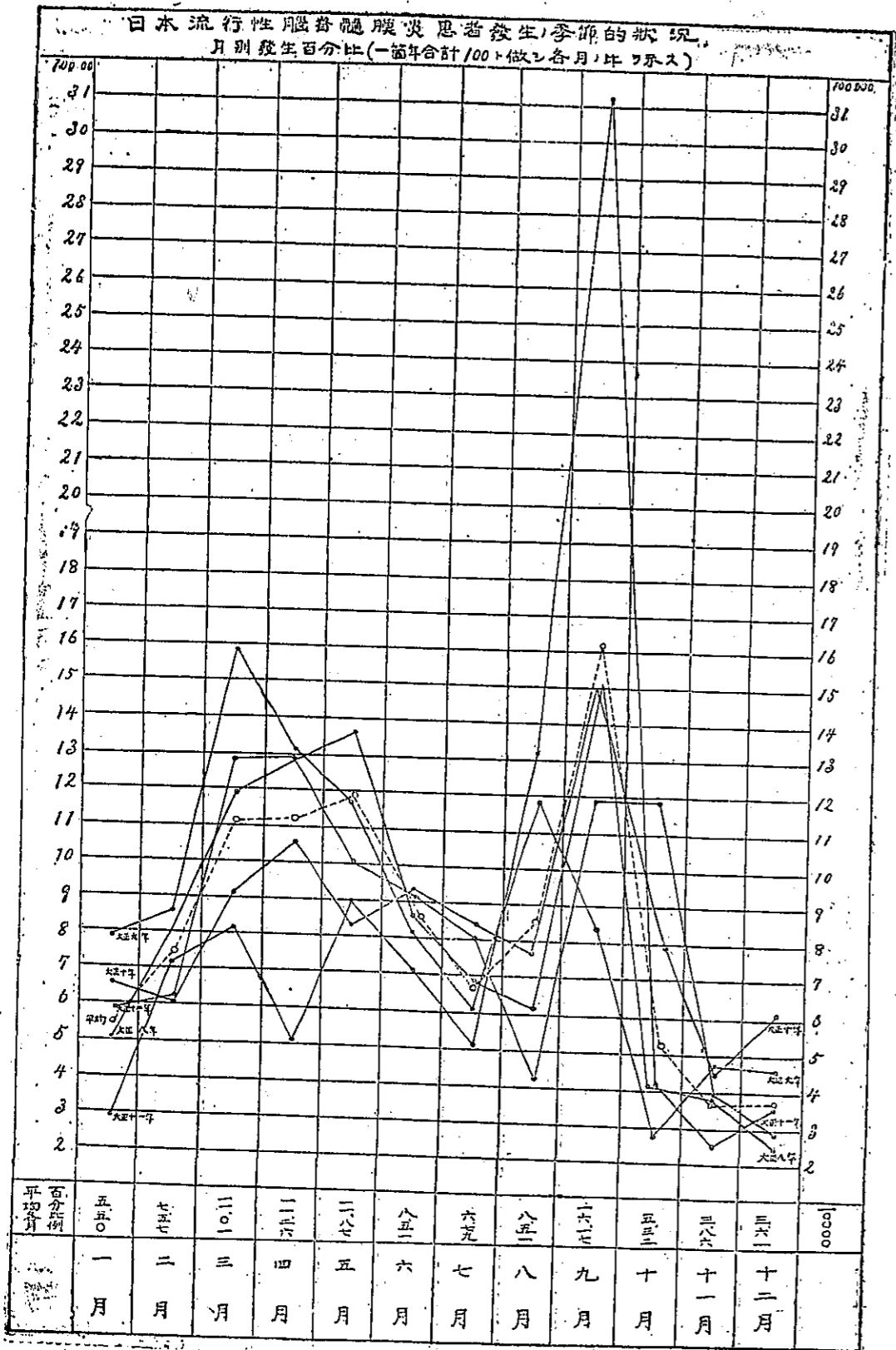
流行性腦脊髄膜炎

日本ニ於テ本病ニ關スル記載アルハ近年ノコトニ屬ス。
 明治四年(一八七一年)奈良、滋賀兩縣下ニ流行アリ其後京都及大阪附近ニ流行セシモ患者數等判明セス明
 治二十年(一八八七年)以降大阪、廣島、東京等ノ兵營ニ本病散發シタリシカ明治廿七年(一八九四年)明治
 廿八年(一八九五年)日清戰爭以來内地各都市ニモ流行的發生ヲ見ルニ至リ特ニ大阪地方ハ病毒比較的侵淫シ
 時ニ相當ノ流行ヲ見タリ。

本病ノ法定傳染病ニ加ヘラレタルハ大正七年(一九一八年)ニシテ大正八年(一九一九年)ニハ全國ニ二千四
 百餘人ノ患者ヲ出シ近年ニナキ發生ヲ見タルモ其ノ後ハ毎年七百人前後ニシテ千人ヲ超ヘタルコトナシ。

本病ノ地方的分布ハ大阪、兵庫、京都ノ地方ニ例年トモ多數發生シ其ノ他ニ於テハ一ケ年二十人前後ノモ
 ノ多ク、年々發生少キハ富山、石川、福井等ノ裏日本ニシテ全年一名ノ發生ヲ見タルコトアリ、九州ニ於テ
 ハ大分、宮崎ノ兩縣亦同様ニ患者發生少ナシ。

本病ノ死亡率ハ例年五〇・〇%前後ナリ。



(37)